ISSN 1882-5370

尚美学園大学芸術情報研究　第 30 号

Journal of Informatics for Arts, Shobi University No.30

研究ノート｜Research Notes

# 美術教育のための抽象美術のイメージ調査
## －作家・美術関係者に対する質問紙調査をもとに－

# Survey of images of abstract fine art for art education
## -Based on findings of a research of artists and specialists-

十時 宏之
TOTOKI Hiroshi

尚美学園大学
情報表現学科　講師

Shobi University

2019 年 3 月

Mar.2019

# 美術教育のための抽象美術のイメージ調査
## ―作家・美術関係者に対する質問紙調査をもとに―

Survey of images of abstract fine art for art education
-Based on findings of a research of artists and specialists-

十時 宏之
TOTOKI Hiroshi

[Abstract]
The author carried out a survey to obtain a basic data to remove preconceived idea of students that they dislike fine art and they are weak for it. The survey has been done by questionnaire of 5 questions targeting 26 authors and people who relate to the fine art.Questions are following; (1) image (2) work (3) author (4) learning experience (5) interest.For the question (2) and (3), respondents raised world famous authors for their answer, while Japanese authors are unfamiliar to them. In the question (4), about 50% of them answer that they have experienced fine art. However, it actually takes up a little under 40% only except those who have studied at specialized course in junior high and college. For the question (5), majority of respondents answer that they are interested in both of them. But only one person showed his specific interest in abstract fine art. It is evident from these findings that abstract fine art is unpopular subject in the class and little study has been done so far. The important key words “heart”and “experience” obtained by chance in the question (1), can be and should be applied to materials and study of fine art.

[抄録]
筆者は , 学生の美術に対する「苦手意識」,「美術嫌い」を改善するための基礎資料として「抽象美術のイメージ調査」を作家・美術関係者 26 名に対して，5 項目からなる調査を行った。質問は、(1) イメージ (2) 作品 (3) 作家 (4) 学習経験 (5) 興味とした。質問 (2)，(3) では，上位は世界的な有名作家が多く，日本人作家の作品イメージが上位に挙がらなかった。質問 (4) では，約半分が学習経験ありとの回答だが，中学校と大学の専門教育を除くと 4 割弱であり，学習経験としては少ないといえる。質問 (5) では，大多数は「どちらも興味がある」との回答を得たが ,「抽象美術に興味がある」との特定した回答はわずか 1 名であり , 取り上げられる割合が低いといえる。以上の調査結果を踏まえ，抽象美術に対する学習経験や興味・関心の実情としては , 全体的に低いことが示唆された。また，(1) より導き出された 2 つの要素「表現」と「心」を活かした題材・技法を提案し，実践につなげたい。

[ キーワード ]
美術教育，抽象美術，イメージ調査，作家・美術関係者，表現と心

Keywords:
Art education, Abstract fine art, Survey of images, Artists and specialists, Expression and mind

## 1. はじめに

筆者は，今まで中学校，高校，専門学校，大学，障害者の教室において美術教育，指導などに携わってきた。美術に対する「苦手意識」, またその影響からと思われる「美術嫌い」の学生を見かけることが多い。もちろん , 他教科においても苦手意識，嫌いの問題は多く存在することと思われる。

美術教育に携わっている現場の感想として，美術の苦手意識，美術嫌いは絵画にしろ，立体にしろ，「他者との比較による上手・下手」によるものが大きな問題のひとつであると考えられる。

降簱孝（2017）は「苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試みの成果 - 」[1] において，図工・美術の苦手意識について着目している。発達段階で学年が上になれば，その傾向が強くなり，小学校の教師を目指す大学生やベテラン小学校教師にも多く存在する。降旗は，平成 26 年度に図工・美術に対する苦手意識の実態調査として，小学校，中学校，高校，大学の学生に教科の好き・嫌いの印象と意欲と苦手意識の有無について調査している。結果として，「図工・美術は意識として基本的に好きであり，意欲的に取り組んでいる」とあり，「苦手意識としては，小学校中学年から徐々に芽生え，小学校教員養成課程の大学生の役 6 割が大なり小なりの苦手意識を抱いていた」とある。そして，「苦手意識を抱く大学生の多くは，図工・美術は，うまく上手に作品を描きつくらねばならないという強い規範に凝り固まっている」と結論づけている。また，「絵画表現に対する苦手意識は，工作や立体表現よりもかなり強いという傾向」も示している。

筆者の考えでは，幼少期は楽しかったお絵かきや工作，小学校では図工として楽しんでいた筈である。一般的に小学校の低学年の児童は面白いものを描く。実際の顔に忠実でなかったり，車などを描いても車輪の数が合わなかったりして，対象の再現性を考えず，自由に描くからであろう。また，印象が強いものを強調して描き，対象の大きさやつり合いなどにあまり注意を払わず，空間関係や遠近を無視して自由に描かれていることが大人にとっては魅力的に映るのかも知れない。ピカソは空間や対象の再現性の問題を無視し，対象を面で分析的にみることでキュービズム（立体派）という新しい可能性を提示した[2]。

今まで取り組んできた筆者の授業課題のなかで，「抽象表現」を扱ってきた授業において生徒が伸び伸びと制作に取り組んでいる印象が強いように感じる。例えば，どの教科書にも扱われている表現題材として中学校におけるモダンテクニックの技法が挙げられる。ポロックの代表的な表現であるドリッピング，エルンストのデカルコマニーやフロッタージュなどである。この題材は，自由度が高い，遊びの要素が強いなどの理由があるかも知れないが生徒を引き付ける魅力はそれだけではないように思われる。

美術教育者・画家であったウイリアム・ジョンストン（William Johnstone,1897-1981）の著書『思春期の美術』[3] では，思春期（12 歳～ 15 歳）における造形表現の危機（年齢にふさわしい表現を身につけていないために描画に対して自信を失う）を乗り越えるための方法が提示されている。ジョンストンは，美術教育の新たな方法として，1920 年代に

パリで学んだキュビスムや抽象絵画，シュルレアリスムなどの 20 世紀美術の方法論を積極的に取り入れた。（当時は，伝統的な美術教育であり，先進的なものであった。）それは，コラージュ，モンタージュなどの題材であり，偶然の効果や写真の活用などを取り入れることで，技術的な問題に対して抵抗感を減らし，想像力を解放させ，失った自信を取り戻させようとする試みであった。筆者の意見としても，当時においてジョンストンの抽象絵画などを取り入れた試みは，現在の美術教育におけるモダンテクニックなどの技法に近いものであり，苦手意識を持つ生徒が伸び伸びと取り組める魅力的な方法であると考える。

一方，「他者との比較による上手・下手の問題」と関連して，小学校の高学年ごろより，見えるものを見えるように再現したいという技術的な欲求が表れることも事実である。それを受ける形で授業体系も「対象を再現的（写実的）に描く能力の育成」に比重が多く置かれているのが現状である。

ストレスを軽減させ，想像力を高め，自信を取り戻させようとするジョンストンの方法は，再現的能力の育成に比重をおく現在の美術教育に対しても参考になることと考える。

さらに 20 世紀以降の現代美術や抽象美術に目を向けると，それは写実的，再現的なものだけではなく，作家の個々の精神を自由に，そして独自に作品で表そうとしている。「美術教育の意義」を問われている昨今，精神的な問題をよりつなげる意義があるならば，抽象美術を教育で掘り下げて扱うことは大きな意義があると考える。

そこで，抽象美術と教育を考察するに当たって，「抽象美術のイメージ調査」を行った。その対象者として，現在芸術を専門に活動している作家・美術関係者に対して調査した。

## 2. 作家・美術関係者に対するイメージ調査

### 2-1　目的

調査目的としては，生徒自身の抽象美術に対する考えを理解するだけでなく，現実に実社会で活動している作家・美術関係者の捉えている抽象美術のイメージなどがどのようなものかと筆者自身が理解し，授業指導に役立てていくための基本情報を得ることである。これにより，文献だけではなく，実際の生の声を参考にすることは，より実情が明確化されるのではないかと考えるからである。また，専門家である作家・美術関係者に対して調査することはその回答事例が少なく，考察に活用できると考えるからである。

### 2-2　方法

「抽象美術のイメージ」について以下のアンケート調査を行った。題目としては，「抽象美術についてのイメージ調査」であり，調査項目数は，以下の（1）～（5）の 5 問とした。

○調査対象：作家・美術関係者
○調査期間：2017 年 12 月～ 2018 年 1 月
○アンケート調査項目数：5 問
(1) 抽象美術に対するイメージ
(2) 抽象美術でイメージする作品名
(3) 抽象美術でイメージする作家名
(4) 学校教育（小学，中学，高校，大学）で抽象美術について学んだことがあるか

(5) 抽象美術と具象美術のどちらに興味があるか

対象者としては，作家（美術教育）及び芸術領域を専門にしている研究者，美術館・画廊に関わっている人たちであり，全国的となった。調査人数は，26 名（20 歳代～ 80 歳代）（表．1）となった。

表 1：調査者名と専門など

| 番号 | 名前 | 性別 | 専門 | 年代 |
|---|---|---|---|---|
| ① | Y | 女 | 絵画 | 80代 |
| ② | K | 男 | 日本画 | 70代 |
| ③ | N | 男 | 版画・リトグラフ | 70代 |
| ④ | S | 女 | 美術 | 70代 |
| ⑤ | T | 男 | 油彩・水彩 | 70代 |
| ⑥ | M | 男 | 版画家 | 60代 |
| ⑦ | S | 男 | 油絵，木版画 | 50代 |
| ⑧ | T | 男 | 版画・ ドローイング | 50代 |
| ⑨ | H | 女 | 版画 | 50代 |
| ⑩ | S | 男 | 版画 | 50代 |
| ⑪ | U | 男 | 現代美術 | 50代 |
| ⑫ | W | 男 | 木版画 | 40代 |
| ⑬ | K | 男 | 版画 | 40代 |
| ⑭ | O | 女 | 版画 | 30代 |
| ⑮ | S | 女 | リトグラフ | 30代 |
| ⑯ | S | 女 | 銅版画 | 20代 |
| ⑰ | M | 男 | 石彫 | 60代 |
| ⑱ | A | 男 | 彫刻 | 60代 |
| ⑲ | S | 男 | 造形作家 | 40代 |
| ⑳ | S | 男 | 彫刻 | 40代 |
| ㉑ | H | 女 | 版画・テキスタイル | 60代 |
| ㉒ | S | 女 | テキスタイル | 40代 |
| ㉓ | S | 男 | 美術館館長（博物館学芸員） | 80代 |
| ㉔ | A | 男 | ギャラリー運営 | 60代 |
| ㉕ | Y | 女 | 西洋美術史 | 50代 |
| ㉖ | N | 女 | 芸術 | 50代 |

回答者としては，「絵画・版画の平面を専門とする人たち，①～⑯の 16 名（男性 10 名・女性 6 名／ 50 代：5 名，70 代：4 名，50 代：2 名，40 代：2 名／ 80 代：1 名，60 代：1 名，20 代：1 名）」，「彫刻・立体を専門とする人たち，⑰～⑳の 4 名（男性 4 名／ 60 代：2 名，40 代:2 名）」，「テキスタイルを専門とする人たち，㉑～㉒の 2 名（女性 2 名／ 60 代:1 名，40 代：1 名）」，「研究者・画廊の人たち，㉓～㉖の 4 名（男性：2 名，女性：2 名／ 50 代：2 名，80 代：1 名，60 代：1 名）」である。

回答者の芸術家の大多数は，大学で芸術の専門教育を学び，その後，学校教育や何らか

の形で美術指導に携わっている人たちである。また，芸術家以外として，研究者 2 名は現職の大学教授，美術館館長と画廊運営者である。

## 3. 分析・考察

### 3-1　調査項目「(1) 抽象美術に対するイメージ」について

#### (1) 分析

調査した「(1) 抽象美術に対するイメージ」については，26 名中 25 名の人より回答が得られた。得られた回答のすべてを以下に挙げてみる。

①固定観念にとらわれない自由な発想をもっている
②具体的な物の形が読み取れない領域
③既成概念を壊し，新しい価値観を生み出す
④自由，内的世界
⑤未回答
⑥抽象絵画は専門家による専門家のための美術であり，具象絵画は専門家による一般の人のための美術（要約）
⑦色と形を画面構成で表現する
⑧表現の幅が広い，気楽に鑑賞できる
⑨具体的な形が表現されていないので，わかりにくい
⑩フラットな色面
⑪本質の探究／気分の表出
⑫ 20 世紀美術
⑬想像を刺激される，「よくわからない」と思っている人が多い
⑭具体的な形のない絵
⑮心の目で見られるもの
⑯作家の感じた印象，心象，絵の具のストローク，色や構図で見せる
⑰具象作品に比べて作品の意図がより明確であり，また常に新しさが求められる
⑱ 99.98％具象美術に思う。目に見える作品は全て具象ではなかろうか
⑲楽しくて，面白くて，難しい
⑳具象美術のその先の美術
㉑目に見える事物をそのままでなく，心の印象でとらえる
㉒心象
㉓はっきりとした物の形が見えない作品
㉔側の意識の表出（社会との係わりで，普遍化する）
㉕古い
㉖心象や概念を抽象化し表現した美術で主に立体作品

分析については，KJ 法（川喜田 ,1967）[4] の手法を利用し，筆者がグループ化を試みた。KJ 法とは，創造性開発（または創造的問題解決）の技法である。

回答数 25 名中，主な言語・文節などを確認しながら，単語を抽出した。例えば，「⑯作家の感じた印象，心象」であれば，「印象」「心象」，「③既成概念を壊し」であれば，「既

成概念」を抽出・分類し，単語の意味に合わせてKJ法の手法を利用して，「印象」「心象」「既成概念」のように同義語をひとつのグループとしてまとめた。その結果は，（表2）で示す通り，「表現（スタイル）」「心（心象・概念）」「形」「気分」「色」「発想」「構図」「自由」という8つにグループ化することができた。

表2. グループ化とその命名

| グループ名 | 回答者 |
|---|---|
| 1. 表現（スタイル） | ⑥⑥⑧⑫⑰⑰⑱⑳㉕　抽出数：9 |
| 2. 心（心象・概念） | ①③④⑮⑯㉑㉒㉖　抽出数：8 |
| 3. 形 | ②⑦⑨⑭㉓㉖　抽出数：6 |
| 4. 気分 | ⑧⑪⑬⑲㉔　抽出数：5 |
| 5. 色 | ⑦⑩⑯⑯　抽出数：4 |
| 6. 発想 | ①⑪⑬　抽出数：3 |
| 7. 構図 | ⑦⑯　抽出数：2 |
| 8. 自由 | ⑧⑨　抽出数：2 |

これら命名された8つのグループをさらに「外面的」表現（スタイル），3. 形，5. 色，7. 構図）と「内面的」（2. 心（心象･概念），4. 気分，6. 発想，8. 自由）に分けてみると，（表3）のようになり，表現方法や形について述べたものである「外面的」と精神性・概念などについて述べたものである「内面的」の二つに大きくカテゴリー分類することができる。

（表3）で示す通り，「外面的」は「表現（スタイル）」「形」「色」「構図」で分類され，「内面的」は「心（心象・概念）」「気分」「発想」「自由」で分類することができる。

表3. 二つの分類

| 外面的（表現・形など）<br>／抽出数計21 | 内面的（精神性・概念など）<br>／抽出数計18 |
|---|---|
| 表現（スタイル）抽出数：9<br>形　抽出数：6<br>色　抽出数：4<br>構図　抽出数：2 | 心（心象・概念）抽出数：8<br>気分　抽出数：5<br>発想　抽出数：3<br>自由　抽出数：2 |

単語の抽出数の割合としては，外面的が21個，内面的が18個であり，約半分ずつの結果が得られた。

まとめて導き出されたグループ化の上位は「外面的」は「表現」であり，「内面的」は「心」であった。

### (2) 考察

以上のように抽象美術のイメージより，KJ法の手法を利用し，グループ化を試みた結果，「表現（スタイル）」「形」「色」「構図」「心（心象・概念）」「気分」「発想」「自由」でグループ化ができた。さらにカテゴリー分類してみると，「外面的」について述べたものと，「内面的」について述べたものの二つに分類できる。「外面的」について述べたものの上位概念は「表現」であり，「内面的」について述べたものの上位概念は「心」であった。

以上をまとめてみると，「抽象美術のイメージは，外面的と内面的の二つの要素で構成され，外面的な要素は『表現』（スタイル・形・色・構図）と，内面的な要素は『心』（心象・概念・気分・発想・自由）で構成される」といえる。

## 3-2 調査項目「(2) 抽象美術でイメージする作品名」について

### (1) 分析

この項目の回答数は 20 名，無回答は 6 名であった。作品名以外の回答として，「①意外と作品の題名は覚えていない。作家の作風は覚えていても作品名は印象に残っていません。」「㉒影像として思い出せるのですが，題材が思い出せない。」などのイメージはあっても，名称は思い出せないとの回答も得た。ここでは二つ以上挙がった作者・作品名（表 4）を提示してみる。

表 4. 作者・作品名

| | |
|---|---|
| モンドリアン | 「赤，青，黄のコンポジション」(2)，「ニューヨーク・ブギウギ」，「青と赤のコンポジション」，「モンドリアンの作品」 |
| カンディンスキー | 「小さな喜び」，「三つの色斑（いろむら）のある絵」，「コンポジションシリーズ」，「カンディンスキーの作品」 |
| ピカソ | 「ゲルニカ」，「泣く女」，「ピカソの作品」 |
| ポロック | 「大聖堂」，「ポロックの作品」 |
| タピエス | 「人質」，「タピエスの作品」 |
| ブランクーシ | 「空間の鳥」(2) |
| ダビンチ | 「祈り」，「モナリザ」 |

（ ）内は回答数

複数回答数において最上位の作家は，「赤，青，黄のコンポジション」(2)，「ニューヨーク・ブギウギ」，「青と赤のコンポジション」などのモンドリアンであった。その次に回答数の多い作家は，「小さな喜び」，「三つの色斑のある絵」，「コンポジションシリーズ」などのカンディンスキーであり，その次に「ゲルニカ」，「泣く女」らのピカソであった。これらは，学校美術の教科書にも常に紹介されている作家たちである。例えば，開隆堂出版（平成 28 年発行）の中学校教科書『美術 2・3』[5] の「形や色彩からのメッセージ - 抽象表現を楽しむ」ではモンドリアン，カンディンスキー，ピカソの「ゲルニカ」，日本文教出版（平成 25 年発行）高校教科書『高校美術 1』[6] の「色と線で見る造形 - 抽象絵画とデザイン」ではモンドリアン，資料年表ではカンディンスキー，ピカソなどが紹介されている。

作品名として具体的に挙がった日本人の作品は八木一夫の「ザムザ氏の散歩」と個人蔵の 4 作品のみであり，日本人の作品が上位に来ることはなかった。

### (2) 考察

美術作品全般にいえることかも知れないが，頭の中にイメージはあっても名称は記憶していなかったり，忘却してしまったりしている。回答数の上位は教科書に掲載されている作家が多かった。このことより，世界的な有名作家以外は授業において触れる機会が少ないともいえるだろう。

また，日本人作家の作品イメージが挙がらなかったことでも，日本人作家の作品イメー

ジに対する価値観は低いということが示唆できる。

### 3-3 調査項目「(3) 抽象美術でイメージする作家名」について

#### (1) 分析

この項目の回答数は 24 名，無回答は 2 名であった。無回答のひとつとして「人数が限りないものになってしまう。」との回答もあった。回答として挙げられた作家数は 45 名であり，ここでは 3 名以上回答として重複して挙がった作家名と回答数として（表 5）に提示してみる。

表 5. 作家名と回答数

| | |
|---|---|
| カンディンスキー | 13名 |
| ポロック | 10名 |
| クレー | 7名 |
| モンドリアン | 6名 |
| ロスコ | 6名 |
| ミロ | 3名 |
| トンブリー | 3名 |
| ステラ | 3名 |

作品名と同様の結果を予測したが，重複した回答数の上位はカンディンスキー，ポロック，モンドリアンであった。ちなみに回答された日本人の作家名は，大沢昌助，難波田龍起，猪熊弦一郎，岡本太郎らであった。

また, 45 名が挙がった作家内訳としての外国人作家は 36 名(80%), 日本人作家は 9 名(20%）であった。

#### (2) 考察

調査（2）（3）の質問は両者とも類似した上位回答を予測したが，必ずしもそうではなかった。調査（3）でも日本人の作家が少なかった。

### 3-4 調査項目「(4) 学校教育（小学，中学，高校，大学）で抽象美術について学んだことがあるか」について

#### (1) 分析

ここでの回答数は26名であり, 抽象美術の学習経験が「ある」と回答した人は14名(54%)（小学校:2 名，中学校 4 名，高校 2 名，大学 4 名，不明 3 名･中学･高校重複 1 名）であり，「なし」は 12 名（46%）であった。一般的な美術教育という観点から考えると，小学校・中学校・高校だけでいえば 10 名（38%）であった。調査項目「(4)」の結果を（表 6）として示す。

表 6. 抽象美術の学習経験

| 学校教育（人数） | 学年／題材 |
|---|---|
| 小学校（2名） | ㉔60代：小5／絵を描くときの注意<br>㉖50代：小学／クレーの作品 |
| 中学校（4名） | ①80代：中学3年／印象（コンサート）音楽を絵画に表現している　⑰60代：中学校／学校で東京都美術館に現代美術の展覧会を観に行く　⑲40代：中学１年／海（湘南海岸の写生課題）　⑳40代：中学2年／ゲルニカの模写 |
| 高校（2名） | ㉕50代：高校1，2年／デュシャン「泉」　⑳40代：高校1年／美術概論，デザイン概論 |
| 大学（4名） | ㉑60代：多摩美術大学・武蔵野美術大学　⑬40代：武蔵野美術大学⑭30代：武蔵野美術大学／ポロック　⑯20代：大学1年／題材名：西洋美術史での抽象画の歴史，流れ |
| 不明（3名） | ⑦50代：不明　⑪50代：きちんとした課題などで学習した記憶は明確にはない　⑮30代：不明 |

この学習経験の回答意義から，小学校では「㉔ 60 代：絵を描くときの注意」や「㉖ 50 代：クレーの作品」，中学校では「① 80 代：印象（コンサート）音楽を絵画に表現している」や「⑰ 60 代：学校で東京都美術館に現代美術の展覧会を観に行く」など，高校では「㉕ 50 代：デュシャン『泉』」や「⑳ 40 代：美術概論，デザイン概論」，大学では「⑭ 30 代：ポロック」や「⑯ 20 代：西洋美術史での抽象画の歴史，流れ」などが挙がっている。

### (2) 考察

抽象美術について学んだことが「ある」と回答した抽象美術の学習経験の人数は約半分（54%）であり，年代的な偏りは特にみられず，中学校と大学での教育が多くを占めた。大学での専門教育を除くと 10 名（38%）程度であり，学習経験としては少ないと思われる。

## 3-5 調査項目「(5) 抽象美術と具象美術のどちらに興味があるか」について

### (1) 分析

調査項目「(5)」に対して，回答数は 26 名であり，「抽象美術に興味がある」と回答した人は 1 名（4%），「具象美術に興味がある」と回答した人は 6 名（23%），「どちらも興味がある」と回答した人は 19 名（73%）であった。

### (2) 考察

項目（5）の大多数（73%）の回答者が「どちらも興味がある」と回答している。抽象美術に興味があると特定して回答した人はわずか 1 名（4%）であり，具象美術と特定した 6 名と比べてみると取り上げられる割合が低いといえる。

## 4. まとめ

今回，抽象美術と教育を考察するに当たって，「抽象美術のイメージ」についてアンケート調査を作家・美術関係者である２６名に対して行った。以下，まず質問（2）～（5）を振り返り，最後に質問（1）についてまとめていく。

まず，質問（2）「抽象美術でイメージする作品名」では，作品名で複数回答があり，上

位に挙げられた作家名はモンドリアン，カンディンスキー，ピカソら教科書に掲載されている世界的な有名作家が多く，日本人作家の作品イメージが上位に挙がることはなかった。

質問（3)「抽象美術でイメージする作家名」では，質問（2）と類似した質問であり，同様の結果を予測したが，重複した上位はカンディンスキー，ポロック，モンドリアンであり，必ずしもそうではなかった。作家は 45 名挙がったが 8 割が外国人作家であり，日本人作家は（2）同様に少なかった。

質問（4)「抽象美術についての学習経験」では，約半分が学習経験ありとの回答であったが，中学校と大学での教育が多くを占め，大学での専門教育を除くと 4 割弱であり，学習経験としては少ないといえる。

質問（5)「抽象美術の興味」では，大多数は「どちらも興味がある」との回答を得たが，「抽象美術に興味がある」との特定した回答はわずか 1 名であり，取り上げられる割合が低いといえる。

質問（2）～（5）の結果を通して，日本の美術教育において抽象美術に対する学習経験や興味・関心の実情としては，全体的に低いことが示唆された。この調査は，専門に活動している人に対してのものであり，一般的な社会においての理解や関心の実情としては，一層低いことが予想される。

この実情の原因のひとつとして仮説であるが，日本の美術専門教育に原因があるのかも知れない。長い間，指摘されている明治期以降のデッサン・写実を重んじた美術教育に影響があるのではないだろうか。また，「対象を再現的（写実的）に描く能力の育成」に比重が多く置かれている授業体系にも因果関係があるのかも知れない。

最新の中学校・高校の教科書 [5-15] の題材を調査し確認できたところでは，中学校の教科書では開隆堂出版の『美術 2･3』，高校の教科書では日本文教出版の『高校美術 1』と『高校美術 2』だけであり，抽象美術をそのまま題材としてほとんど扱っておらず，多くが想像や空想などの表現補助としてのモダンテクニックなどの技法面での掲載にとどまっている。

当然ながら，教育に携わる人達の興味・関心が低ければ，教育に反映されず，いくら題材として取り組んでも良い授業は決して期待できないだろう。

以上を踏まえると，先にも触れたが，学校教育における「美術教育の意義」を問われている昨今，抽象美術の一層の普及や向上が，美術教育を盛り上げていくキーワードになることだろう。そして，抽象美術の授業内容を技法面での扱いにとどめるだけでなく，作家の個々の精神性や独自性などを掘り下げた授業内容や題材が必要である。

また，今回の調査（1）よって，今まで作家などの調査事例が少ない中で，筆者は，社会人の「抽象美術のイメージ」をまとめることができた。それによると，「抽象美術のイメージは，外面的な要素『表現』（スタイル・形・色・構図）と，内面的な要素『心』（心象・概念・気分・発想・自由）で構成される」といえる。

そこで「抽象美術と教育」を考察するに当たって，この二つの要素を活かした題材・技法を提案し，授業実践につなげたい。美術教育としては，「外面的」である表面的な技術の上手・下手の問題だけでなく，「内面的」である精神性も重要な問題として扱っていきたいと考えるからである。また，「表現」と「心」の両面による抽象美術教育の充実が，美術に対する「苦手意識」，「美術嫌い」の改善につながることと結論に至った。

以上の考察によって，今後，筆者が勤務している高校において授業実践を行いたい。ま

た，今回は社会人に対してのイメージ調査であったが，学生に対しても同様の調査を行い，研究を深めていきたいと考える。

## 引用文献


1. 降簱孝「苦手意識を抱かせない教育コンテンツの研究 - 図画工作・美術に対する苦手意識解消の試みの成果 - 」『大学美術教育学会 広島大会（大会案内　研究発表概要集)』56, 2017 年 , 53 頁。
2. 中谷洋平 , 藤本浩一編『美と造形の心理学』北大路書房 ,1993 年 ,114-126 頁。
3. 新井哲夫編『思春期の美術教育 - 造形表現の質的転換期とその課題 - 』日本文教出版 , 2018 年 ,20 - 27 頁。
4. 川喜多二郎『発想法 - 創造性開発のために』中央公論社，1967 年，65-114 頁。
5. 藤沢英昭 , 柴田和豊監修『中学美術 2・3』開隆堂出版 ,2016 年 , 34-37 頁。
6. 永井一正 , 木島俊介監修『高校美術 1』日本文教出版 , 2013 年 , 26-27,72-77 頁。
7. 永井一正 , 木島俊介監修『高校美術 2』日本文教出版，2014 年。
8. 藤沢英昭 , 柴田和豊監修『美術 1（中学)』開隆堂出版 ,2016 年。
9. 春日明夫ほか『美術 1 出会いと広がり（中学)』・『美術 2 ・ 3 上学びの深まり（中学)』・『美術 2 ・ 3 下　美の探求（中学)』日本文教出版，2016 年。
10. 酒井忠康ほか『美術 1 （中学)』・『美術 2 ・ 3 （中学)』光村図書出版，2016 年。
11. 永井一正 , 木島俊介監修『高校美術 2』日本文教出版，2014 年。
12. 永井一正 , 木島俊介監修『高校美術 3』日本文教出版，2015 年。
13. 酒井忠康ほか『美術 1 （高校)』光村図書出版，2017 年。
14. 酒井忠康ほか『美術 2 （高校)』光村図書出版，2014 年。
15. 野田弘志ほか『美術 3 （高校)』光村図書出版，2009 年。